

山の民から少数民族へ

タイ北部・ラフの山地民意識とその変化

西 本 陽 一*

From Mountain People to Ethnic Minority: Consciousness as Mountain People and its Change among the Lahu of North Thailand

Yoichi NISHIMOTO *

Abstract

The Lahu people, a highland dwelling ethnic minority in mainland Southeast Asia and southwest China, have historically practiced swidden agriculture, and for many generations lived and moved in areas under the pressures of diverse valley dwelling peoples. Their whole population probably exceeds 70,000, most of whom lived in the remote areas within five modern states: China, Burma, Thailand, Laos, and Vietnam. In each of these states governed by lowland peoples, the Lahu are an ethnic minority without a country of their own. However, if we change our viewpoint, the Lahu appear as people with different attributes. While on a political map comprising modern nation-states the Lahu are divided and included in the five sovereign states, whereas on a topographic map, the Lahu settlement area appears as one geographical area and the people live in one environmental niche. Actually, in pre-modern time, natural environments were the primary condition defining the life-ways of peoples, both highlanders and lowlanders. Diverse ethnic peoples in the pre-modern Lahu settlement area interact with each other, which constituted a patterned ethnic constellation. This ethnic relation, however, began to change after Western colonialism introduced modern notions of nation-state, international boundary, and sovereignty. In the modern era, these modern ideologies have become political reality through diverse national policies for nation-building. Now, even in the remote areas where the Lahu people often find themselves, one cannot live without being influenced by a central government. The lives and the world view of the Lahu people have also become more and more conditioned by the modern conceptual framework of nation-state. However, the Lahu of North Thailand still refer to themselves as “mountain people”. This self-identification is based on the binary opposition between “mountain” and “plain” or “town”. The Lahu understand modern concepts mainly from a pre-modern world-view. Modern concepts, for example, “government” is perceived less as an abstract agency rather than as a personalized patron-like ethnic neighbor who both oppresses and supports its people. On the other hand, modern ideas, such as “state” and “development” seem to have gradually enter Lahu concepts. The present Lahu perception is based both on the pre-modern

* 金沢大学文学部

* Faculty of Letters, Kanazawa University

and modern conceptual frameworks, and the power relation between the two frameworks changes depending on conditions. Moreover, another huge process, "globalization", could in the future modify the basis on which the Lahu view the world surrounding them. Studying the world-views of marginal peoples, including the Lahu, requires multiple perspectives, and should not be limited either to area or national conceptual frameworks.

Key words : mountain people, ethnic minority, ethnicity, nation-state, Lahu, Thailand

キーワード : 山の民, 少数民族, 民族, 国民国家, ラフ, タイ

I. はじめに

1997年の秋に筆者は現地調査のために、タイ北部のラフの村に住んでいた。タイで生まれた子供たちを除いて、村民は全て中国雲南地方カビルマ・シャン州の出身で、ビルマでの民族紛争を逃れるため、古くても過去30年程の間にタイに移入してきた人々だった。そのころ筆者は基礎資料収集のために戸別調査していたが、15歳以上の村民のほとんどが「教育なし」または小学校低学年での中退者だということが分かった。そして筆者はある家で、「学校なんか行ったことあるもんか、俺ら山の者だろう」という世帯主の答えに出会った。「学校に行ったことはない」という答えには慣れていたものの、この「山の者」だからという理由づけは筆者の頭に残った。そこには、辺地に住んでいたので学校がなく教育機会がなかったという単なる事実の言明にとどまらず、もともと「文明」などには縁がない馬鹿な山の者が学校になんか行くものかという、自身についての主観的な性格づけがあるように感じられたからである。実際に筆者は村での滞在中に、村民がしばしば自分たちは「山の民」(*hk'aw hk'o ya*)¹⁾ だと言うのを耳にし、さらに自嘲的な語りでは、未開性と野蛮性を含意する「森/荒地」(*heh pui hk'aw*) に自らを結びつけるのを見ることになった(西本, 2000)。

本稿は、タイ北部に暮らす山岳少数民族であるラフを事例として取り上げ、彼らの「山の民」としての自己意識と彼らを取りまく自然および社会的な環境との関係について検討する。筆者はこれまでタイのラフの間でフィールドワークをおこ

なってきたが、そこで印象づけられたことは、ラフの人々が自らを「山の民」と称し、平地の他民族である「町の人」との対比において自己意識を形成していることであった。ラフは「山の民」で平地の他民族は「町の人」だという語りは、平地の他者との二項対立的な対比によって、自らを本質論的に性格づける。タイのラフは、タイという国家の少数民族のひとつとして見られがちだが、彼ら自身はこのような国家的な観点とは違った枠組みから自己と世界を眺めているのである。本稿は、ラフの人々による「山の民」という自己規定・認識を中心に、彼らの置かれた自然および社会的な環境、さらには近年の政治的な状況の変化によるこれらの変容について報告し考察する。なお紙幅の都合により、ラフの「山の民」意識の検討にはラフによる語りに材料が絞られ、行為および語られないものについての検討は今後の課題とする。

II. タイ国家の少数民族としてのラフ

最初に「ラフ」という人々について、通常おこなわれるやり方に従って記述的に紹介したい。ラフはラフ語という、チベット・ビルマ語系の一言語の話者で、自称は「ラフ」、主な他称は「ムスー」である。現在では町に出ての賃金労働と、居住地によっては水稲耕作とが、彼らの生計において重要度を増しているが、歴史的に主要な生業は陸稲と複数の産物を組み合わせた焼畑耕作であった。宗教的面ではサブ・グループごとにかなりの違いがあり、さらにキリスト教の拡大が顕著なものの、伝統的には、至高の創造神グシャー (*G'ui sha*) とともに数多くの精霊 (*ne*) の存在を信じる信仰

表 1 ラフの人口概算 (単位: 人)。

Table 1 Estimated Lahu population.

居住国	人口	出典
中国	411,476	中国政府 1990 年統計
ビルマ	170,000 250,000	スミス, 1997, 47 48
タイ	85,845	タイ国労働・社会福祉省, 1998
ラオス	16,000	Chazee, 1999, 133 134
ヴェトナム	5,400	Dang <i>et al.</i> , 2000, 248
その他	1,800 以上	
合計*	690,521 770,521	

* 各国の数値の基準年や精度には大きな差異があるため目安としてのみ示す。

および実践体系をもっている。ラフは伝統的に文字をもたなかったが、20 世紀の初めよりキリスト教宣教師によってローマ字によるラフ語表記法が開発され、キリスト教徒を中心に一部で用いられている。ラフの人口は全部合わせるとおそらく 70 万人を越え、主な居住地は、中国西南地区、ビルマ・シャン州、タイ北部、ラオス北西部、ヴェトナム北西端など複数の国々にわたっている (表 1)。しかし、ラフはこれらのいずれの国においても国家を担う民族 (ネイション) ではなく、地理的にも社会的にも各国家の周縁部にある「少数民族」あるいは「周辺民族」という位置に置かれている (図 1)。

タイ国内のさまざまな少数民族のうち、北部の山地住民は「チャオカオ」(*chao khao*) と呼ばれ、タイのラフもこの範疇に含められる。「チャオカオ」というタイ語は字義通りには「山の人」の意味であるが、タイ人によって、北部の国境地帯に居住し、焼畑耕作を主な生業とする非タイ系住民を指す言葉として使われている。「チャオカオ」は使用に一貫性のない曖昧な範疇であり、山地の諸民族のもつ差異や詳細にもかかわらず、タイ国内に存在する非タイ系の異人という他者性によって、複数の人間集団を一元的にひとつの範疇に押し込めてしまう。「チャオカオ」は頻繁に使用されるものの、使用者であるタイ人で「チャオカオ」に含まれる民族が何か挙げるのできる人は少ない。「チャオカオ」が含意するのは、近隣諸国より不法に移住してきた、未開の、遅れた、汚い、タイ国

家に忠誠心をもたぬ、ホスト民族であるタイ人とは異質の、信頼できない奴らという山地住民像である。「チャオカオ問題」(*panha chao khao*) という言葉で表わされる通り、タイにおいて北部の山地住民は、麻薬を栽培・売買し、焼畑により森林や水源地などの自然環境を破壊し、国民としての意識をもたない潜在的な反抗分子というイメージを与えられている。

このようなタイ北部の山地住民に対する否定的なイメージの一方で、近年の研究においては、「チャオカオ」のより肯定的な姿や主体性が提示されてきた。特に 1980 年代以降の社会科学的な研究は、地域の小規模社会がタイの国家的な諸過程 (資本主義の拡大、国民国家建設、「開発」など) によって受ける影響や変化、さらに地域の人々によるそれらへの応答や「抵抗」などのテーマを多く取り上げてきた。それ以前の時代の静態的、記述的な民族誌的研究に代わって、地域社会の直面する変化や変容の問題を動的にとらえることが研究の中心になってきたのである。

しかし、これらの研究の多くは、「チャオカオ」という呼称に含意されるタイ北部の山地住民に対する否定的なステレオタイプを共有していないものの、山地住民をタイという近代国家における地理的および社会的な周縁者として捉える点では類似の観点をもっているといえる。つまり、「チャオカオ」という呼称によって山地の諸民族を一括してしまう人々も、研究者 (そしてそれと同様な見方をとる NGO 従事者) の多くも、タイという

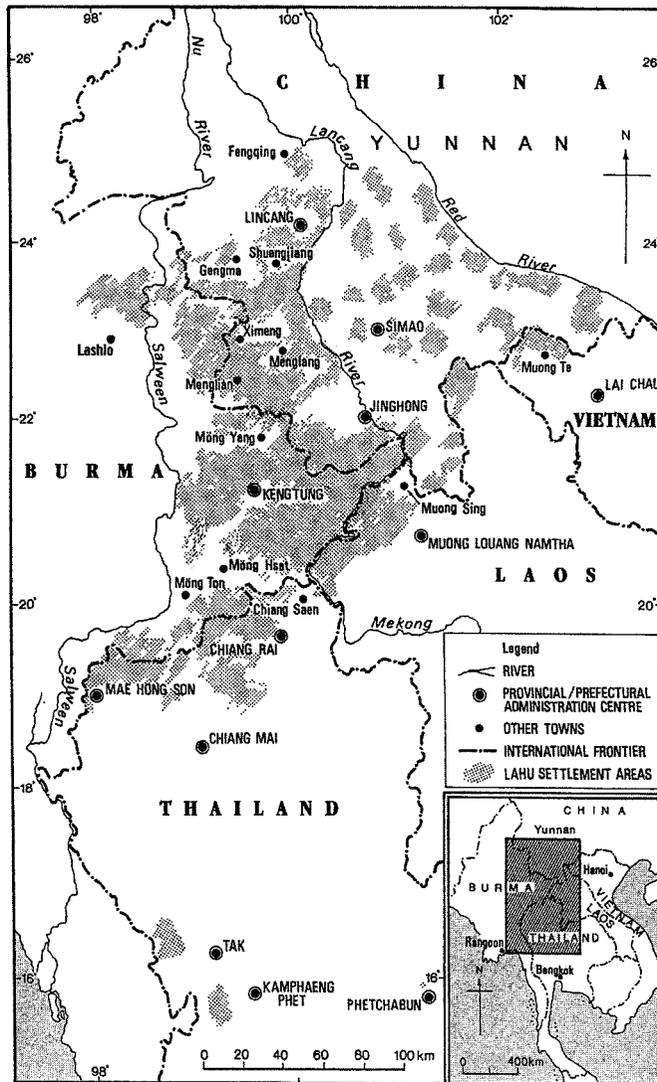


図 1 現在のラフの居住地域。(Walker, 2003 より)

Fig. 1 Lahu settlement areas. (after Walker, 2003)

近代国家の枠組みから北部の山地住民を捉えていることでは共通しているのである。

III. 「山の民」と「町の人」

しかし、ラフを含むタイ北部の山地住民は、タイの国家的な枠組みからのみでは十分に理解することはできない。実際このような国家的な観点から離れてみるなら、ラフは別な位置づけを得るこ

とになる。

上述の通り、一般的な紹介法に従えば、ラフの居住地は「中国西南地区、ビルマ・シャン州、タイ北部、ラオス北西部、ヴェトナム北西端など複数の国々にわたっている」という長々しい説明が必要になるが、これは結局のところ、私たちが世界を国家ごとに色分けされた政治地図として眺めることに慣らされていることに由来している。近

代の理念によれば、地球上のほとんど全ての土地は、いずれかの国家の領土であり、ある場所を指す際にも、何という国のどの部分という方法を取らずにおこなうことは困難である。国家ごとに色分けされた世界地図は人々の思考の枠となり、国民国家イデオロギーを自明視させるようにはたらく。しかし、周辺民族ラフを理解するには、国境線によって明瞭に境界づけられた国家群からなる政治地図を相対化してみる必要がある。

実際に、国家ごとに区分された政治地図を、生態環境にもとづいた地図に替えてみると、ラフの居住する地域は違った姿で立ち現れる。先ほど長々しい言い方を必要としたラフの居住地域は、等高線を塗り分けた地形図においては、緑に囲まれた部分に黄色から茶色っぽい色で浮かぶひとつの統一性をもった地域となる。ラフが主に居住してきた地域は、ヒマラヤ山脈の東南端、大陸部東南アジア北部から中国の西南地方の一部にかけて広がる山地である。以下では、ラフが居住してきたこの地域を、短く「ラフ地域」と呼ぶことにする³⁾。

「ラフ地域」は、そのほとんどを占める山地に、小さな川が深く切り込むようにして流れながら、数多くの小盆地を形成するという地理的な特徴をもっている。かつてリーチは、地域の小規模社会の調査という人類学の慣行から離れて、北部ビルマの山岳地帯という広大な対象を「高地ビルマ」として特定し、そこで繰り広げられる民族間の相互関係について画期的な研究をおこなった(リーチ, 1995)。全体的な海拔標高はやや低く大部分が500-2000mであるが、「ラフ地域」は「高地ビルマ」と同様の地理的な特徴をもち、従来においては同様に、主に地域の生態的条件(そして付加的には、軍事的、交易上の条件)にもとづいて平地住民と山地住民とが、対抗しつつ共生するという民族間関係が形成されていた。政治地図においては、複数の国家に周辺として分断されてしまう「ラフ地域」は、民族間関係においてはひとつの自律的な世界を成している。国家的な観点からは辺境の「少数民族」となってしまうラフは、「ラフ地域」の枠組みでは山地住民の代表である。ラフが

自らを「山の民」と呼ぶときには、ひとつの地理的世界として成り立っている地域の中で自らを位置づけているのであり、ラフの視点に近づいた理解のためには、ラフを「タイの少数民族」「チャオカオ」としてだけでなく、「ラフ地域」の「山地」に暮らす人間集団として眺める必要がある。

IV. 「ラフ地域」の歴史の変容

ところで「ラフ地域」を含む、東南アジア大陸部から中国西南地方にかけて広がる地域において、植民地時代以前には独特の政治構造が存在したことはよく知られている。そこでは平地の勢力によって大小さまざまな規模の政体が形成されたが、規模にかかわらずこれらは同様の性格を有していた。本稿ではこれらの政体を「クニ」と呼んでおく。

前近代的なクニは、明確に線引きされた領域をもちその領域内における排他的な主権を主張する近代国家とは性格を異にした。前近代的なクニによって構成される政治秩序は、ヒンドゥー文明の及んだ地域で発達したが、理念的にそれぞれのクニは天上の聖なる秩序を地上に具現した小宇宙であった。クニの中心である王都の玉座には神聖なる王が坐し、カリスマ的な威光とともに、洗練された文明の光を放つ。クニの政治的統合は外延ではなく中心によって規定されており、王宮や都などの中心はあっても明確な国境をもたず、中心の権威はそこから遠ざかるほど弱まりやがて消えていくという性格をもっていた。それぞれのクニの支配の範囲は王や首長の個人的な能力や資質に大きく依存し、時に応じて伸縮した。この意味でクニは、中央政府による統治のシステムというよりも、中央の王権の権威の及ぶ空間であり、領土というより勢力圏であった(Tambiah, 1976; 関本, 1987; 清水, 1998; Wolters, 1999)。

クニは首長国、藩領、王国、王朝などあらゆる規模の政体を包摂する概念モデルで、前近代においては同型の構造をもった大小さまざまなクニが並立し勢力を競っていた。クニの勢力圏はつねに流動し、より大きなクニの盛衰によって、より小さなクニはより大きなクニの支配下に入ったりそこから離れたったりした。支配は人間や物資などの資

源の利用・収奪に関わるものであるよりも、位階や威信などに関わる名目的な朝貢・従属関係であり、それぞれのクニは相対的に自立的であった。このような同型で、一定の自立性をもつ数多くの大小さまざまな勢力の異なるクニは、中央集権的な体系の中に置かれるのではなく、属人的な紐帯の連鎖の中で結びついていった。理念的にはひとつの有力なクニの周囲には多数の衛星国が、幾重もの同心円状の層を成して分布し、マンダラのような姿を示していた（Tambiah, 1976；関本, 1987；清水, 1998；Wolters, 1999）。

中心によって規定されるこれらのクニの勢力圏の周辺部に目を移すと、そこには複数の勢力が重層したり、逆にいずれの勢力圏にも影響されない権力の真空地帯のようなものが存在した。平地によるクニの勢力圏によって構成された世界の中で、力に劣る山地住民は、農業生産性が低く、平地による支配の及びにくい「辺境」の山地を居住地としてきた。そこでは、「山地」民族集団と「平地」民族集団との区分とが先にあったというよりは、むしろ長い歴史の過程の中で、力に劣る人々が山地へと追いやられていったという方がふさわしい。辺境の山地住民がそこで環境に適應する形で生活形態を発達させてきた一方、力にまさる集団が肥沃な盆地の環境に適應してきたことによって、さまざまな面では対照的な両者の属性が形作られてきたのである。自然環境による規定力が圧倒的に大きかった前近代において、それぞれの環境に適合した形での生活形態の発達には、広い意味での「文化」の面にも及び、「平地」と「山地」の住民は、言語、宗教、衣装、慣習などの面でも明確な対照を示してきた（Tambiah, 1976；リーチ, 1995）。

以上のような前近代的な政治構造に根本的な変化をもたらす契機になったのは、西欧諸国による植民地主義であった。近代国家は、中心によってではなく、国境という地図上に引かれた線によって、外側から規定される範囲として存在する。ある国家と隣接の国家との境界は、国境線によって明確に区切られ、権力の重層性や空白部分は排除される。国境線で囲まれた国家領土の内部におい

ては、中央政府が一元的に主権を行使し、個人は特定のあるひとつの国家の国籍をもつべきとされる。このような、国境という線によって囲まれたものとしての領土、領土内に維持されるべき一元的な国家主権、民族的な単位と政治的な単位とを一致させるべきだとする国民国家などの観念は、近代の文化的な構築物である（ゲルナー, 2000）。植民地主義は「ラフ地域」にも近代国家的な観念を移植し、これらの観念は植民地政府およびそれらを継承した独立国家の政府による諸政策の執行によって、徐々に実体性をもってきた。

18世紀後半には、「ラフ地域」への西欧の植民地勢力の侵入に際して、在地の平地政体は「辺境」の支配確保のために軍事遠征や直接統治を強めた。その後、主に植民地勢力によって中国・ビルマ・シャム（タイ）・ラオスの国境が画定され、地図上に描かれたこの理念上の国境は、植民地時代とそれに続く時代における各国の中央政府による周辺地域への行政管理拡大によって、「ラフ地域」に次第に大きな影響力をもってくる。これは大きく見るならば、前近代における主に生態的条件にもとづいた民族間関係に代わって、近代国家的な観念と現実とが漸次的に支配力を増してくる過程である。従来「ラフ地域」にとって外在的で遠い存在であった国家や政府が、「山の民」ラフとの直接的な接触や関係を増してくるのも、この過程においてである。

V. 「民族」間関係

しかしこれらの近代の諸過程がかなり進行した現在においても、諸民族間の関係から構成されたラフの世界認識が、完全に別の新しいものに取って代わられた訳ではない。

上述の通り、歴史的に「ラフ地域」における民族間関係の構図は、主に生態的な条件によって規定されていた。自然環境の点から「ラフ地域」は大まかに、盆地である「平地」部分と斜面である「山地」部分とから成り立っており、ラフが主に居住してきた部分とはこのうちの「山地」部分である。「山地」部分にはラフの他にも種々の山地民族が居住し、「平地」部分は傣人、シャン人、北タイ人な

どのタイ系の民族によって占められている。類型的に言えば、「平地の民」は、盆地に定住し、水稲耕作をおこない、仏教徒で、多数で、文字を所有し、大規模で複雑な政治組織を發展させた、タイ系の言語を話す人々である。これに対して、「山の民」は、高地を移動し、焼畑農業をおこない、非仏教徒（しばしば「アニミスト」とされる）で、少数で、文字を所有せず、小規模で未発達な政治組織しかもたない、非タイ系の言語の話者である。そして「ラフ地域」においては、「文明」は仏教に結びつけられているため、「平地の民」は文明をもつ人々として、「山の民」は未開の人々という位置づけを与えられてきた（Leach, 1960）。

しかしより重要なことは、このような「山」と「平地」、未開と文明という二元論が、ラフ自身によるイーミックな世界観の基礎でもあるということである。ラフ語においては、「ラフ地域」の斜面部は「山」(*hk'aw hk'o [law; hk'o]*)、盆地部は「平地」(*mi taw*)または「町」(*meun hk'aw*あるいは *ven hk'aw*)と表現される。そして斜面と盆地の住人はそれぞれ「山の民」(*hk'aw hk'o [law hk'o] ya*)と「平地の民」(*mi taw ya*)または「町の人」(*meun hk'aw chaw*)と呼ばれる。ラフが自らを「山の民」だと言うときには、自分たちと「平地の民」または「町の人」との二元論的な対比にもとづいている。ラフの民族的アイデンティティは、表面的で目に見える衣装、言語、慣習などの具体的な文化アイテムによって規定されるのではなく、もっと根本的な「山地」住民と「平地」住民との構造的な関係によって形作られている。「ラフ地域」には数多くの山地住民と平地住民とが居住しており、ラフとそれらの集団との相互交渉の歴史の中で、現在の「ラフ」というものが形成されてきた。ラフにとって「ラフ地域」は、「われわれ」と「彼ら」という意識を醸造し、「ラフ」という集団性を形成してきた民族間の相互交渉の「場」だといえる。歴史的にラフは「ラフ地域」に暮らす山地民族であり、平地政体からの支配や圧力を逃れるため、また新しい焼畑耕作地を探すために、中国雲南地方からラオス北西部やビルマ・シャン州を経由してタイ北部へと移動しながら広

がってきた。ラフの「山の民」としての意識は、彼らが何世代もの間、さまざまな平地勢力の政治・軍事、経済、文化的な圧力と支配が拮抗する地域を移動しながら、「平地の民」の圧倒的な力と隣りあわせで生きてきた経験から生み出されてきたものだといえる。

「山の民」と「平地の民」という範疇は、それらとして語られるとともに、日常的な状況においてはしばしば、それぞれ具体的な「民族」集団に代表されて語られる。また「平地の民」という言葉もあるものの、実際にはほとんどの場合「町の人」という言い方がされるほか、ラフが自らの非文明性を自嘲的に語る場合には、「森の人」(*heh pui hk'aw chaw*)が用いられることもある。

歴史的にラフの近隣には、リス (*Li Shaw*)、アカ (*Taw Kaw*)など他の多くの山地民族が暮らしてきた。しかし、ラフはこれらの民族について、大枠においては自分たちと同じ「山の民」として、同様の属性をもち同様の立場にある人々と見なしている⁴⁾。そして、「町の民」とラフとの対比に比べて、ラフと他の「山の民」との関係についての言及は多くない。数多くの民族間関係の中でも、ラフにとって中心的なのは、「山の民」と「町の民」との対比・対抗関係である。

「町の人」として意味される集団にもさまざまな民族が含まれる。中国からビルマを経てタイへと移住してきたラフにとって「町の人」は、中国では僑人 (*Pi Chaw*) あるいは漢人 (*Heh Pa*)、ビルマではシャン人 (*Pi Chaw*) とビルマ人 (*Man K'a Lu*) だっただろうが、現在のタイにおいては、北タイ人 (*Kaw Law*) が隣接民族として彼らの生活にもっとも大きな重要性をもつ⁵⁾。タイ北部のラフにとっては、ラフと「コロ」(北タイ人)との共生と対抗の関係が中心的な軸となる関係である。

もちろんタイのラフにとっても、「山の民」と「町の民」との対比・対抗関係は、「ラフ」と「コロ」とに限ったものではない。タイ国においても「コロ」以外に「町の民」は多い。中でも重要なのは「タイ人」(*Htai chaw*)である。ラフ語の「タイ人」という範疇については、タイ国籍を有するという意味でのタイ国民という意味と、「民族的

な意味での「タイ人」という意味が微妙に重層している。例えば、国家的な帰属の点から見れば「タイ人」と「コロ」とはどちらも「タイ人」であるが、この意味での「タイ人」は「タイ国の民」(*Htai mvuh mi ya*)と言い換えることができる言葉である。この場合の「タイ人」は、現在のラフの生活でも大きな重要性をもつ国籍票の有無、国家的帰属の観点からなされる表現である。

しかしラフにおいて「タイ人」は今でも、第一義的には「民族」的な範疇であり、中央タイ族(シャム族)のこと指す言葉である。彼らにとって「コロ」と「タイ人」とは明確に区別されるふたつの「民族」⁶⁾的な集団である。「コロ」と「タイ人」とは身体的な特徴、生業形態、慣習などにおいては類似の点が多いものの、「コロ語」(*Kaw Law hkaw*)はタイ語の一方言ではなく、「タイ語」(*Htai hkaw*)とは別の言葉と見なされている。「民族」の居住地域についても、「コロ」が北タイのラフの近くに暮らし、日常的に頻繁な相互交渉がなされる相手なのに対して、「タイ人」は「南の方」(*aw haw hpaw*=「下の方」)あるいは「南の国」(*aw haw mvuh mi*=「下のクニ」)の、ラフの多くにとっては聞いたことはあっても生活経験からは遠いバンコク辺りからやってきた人々である。「コロ」と「ラフ」との日常的な相互交渉はひとつの「民族」的な交流の「場」を形作っている。一方で「タイ人」は、ラフの居住する「ラフ地域」やラフと「コロ」の民族間関係の「場」の外側にいて、外部から影響してくる人々である。現在でもラフの日常生活において、「タイ人」と接触する機会は、「コロ」とのそれよりも圧倒的に少ない。

VI. 「クニ」と「土地」

さらにラフは世界を、主に平地の諸民族による勢力範囲から構成されたものとして眺めている。現在タイ北部に暮らすラフの口にのぼる平地住民は、「コロ」「タイ人」「ビルマ人」「シャン人」「漢人」などであるが、これらのほとんどは自らの「クニ」(*mvuh mi*)あるいは「土地」(*mi gui*)をもつ人々として語られる。私たちが、タイ、ビルマ、シャン州、中国と呼ぶものを、ラフはそれぞれ「タ

イのクニ/土地」「ビルマのクニ/土地」「シャンのクニ/土地」「漢人のクニ/土地」と呼ぶ。

私たちが考える近代国家と、ラフのいう「クニ」や「土地」とは、同じ対象を指すように見えても違った概念である。理想的に近代国家は、国境という地図上に引かれた線によって囲まれた領土をもち、その内部においては中央政府が排他的に主権を、領土内のどの部分においても均質的に行使するものと考えられている。国民国家の理念型においては、国家という限定されたひとつの範囲の中で、お互いに顔を会わせたこともない人々同士が、現実に存在するヒエラルキーにも関わらず、水平的な同胞意識を共有し「国民」(ネイション)という「想像の共同体」を形成する(アンダーソン, 1997)。このような理念においては、タイという国家に暮らすのは、タイ文化を共有した、タイ人という民族(ネイション)であり、国家、文化、民族は同一の単位を構成するはずである。

しかし、ラフの語りが示すのは、このような現実ではない。彼らは自分たちが「ビルマのクニ」から「タイのクニ」へと逃れてきたと言い、「ビルマのクニに住んでいたときには」と昔語りする。しかしこれらの移住は、少なくともその時々においては、なんらの書類も登記も伴わず、移住は彼らにとって国籍や国民帰属の変更を意味するものではなかった。ラフは自分たちは「他人のクニに住んでいる」(*shu mvuh mi cheh ve*)と言い、「ラフはクニがない」(*La Hu mvuh mi ma caw*)と語る。ラフは昔からいつでも「他人の(支配)下にいる」(*shu aw haw cheh ve*)と言う。「他人」(*shu*)という言葉は、自分たち以外の人々一般を意味し、ほとんどの場合、力と数に劣るラフに対して、優勢な多数民族である「ビルマ人」や「コロ」や「タイ人」などの平地住民を指す。北タイのラフは、自分たちは今では「タイのクニ」に暮らしていると語るが、その意味の中心は、現在自分たちはタイという国家の国民となったことではない。政治的な混乱により、自分たちは「ビルマのクニ」から「タイのクニ」へ逃れてきたが、どちらの「クニ」においても「ラフ」が「他人」の支配と抑圧下にあるということには変わりなく、

ただ「ビルマ人」から「タイ人」へと支配者が代わっただけなのである。

タイ国におけるラフの平地住民へのますますの従属は、その伝統的な生業であった焼畑耕作の制限の中に端的に現れている。タイ政府は「チャオカオ」による焼畑耕作を国土の森林の急速な消失の原因のひとつと見なし、1990年代からは王立森林局による実際の規制も厳しさを増している。ラフの少なからざる人々は、山地住民による生活のための焼畑よりも、役人も巻き込んだ企業や政治家による盗伐が森林破壊の大きな原因だと語る。しかし、伝統的な生業が制限される一方で、新しい農業形態も確立できず、多くの場所で賃金労働がタイのラフの主要な収入源と呼びうるほどの事態になっている。贅沢品はなくとも、山地で自給中心の焼畑農業によって暮らしていた時代は、他民族からの圧力や支配が少なく、ラフがより自立的に生きていた時代として回想される。ラフ語で賃金労働がしばしば「他人の奴隷をする」(*shu ce te ve*)と表現されるように、他人に使われることは、従来ラフがよしとしないことであった。タイ政府による反焼畑・定住化政策の拡大は、生業形態の変化とともに、ラフによる「山の民」の意味も変えてきている。かつての自由で独立的な民としての「山の民」は、貧しく、他民族の支配下に生きる「山の民」という意味合いを強めてきているのである。

近代国家においてはまた、警察力や軍事力という暴力を、中央政府が合法的かつ排他的に行使する権限をもつと認められる。いまや多くの国で、警察力や軍事力が「暴力」という言葉にふさわしくないと感じられるほどに、国家による統治の正当性は確立している。しかし、タイのラフにとって警察や軍隊は、ビルマの民族反乱軍や北タイのやくざ的な地方ボスらの行使する暴力と、本質的に同種類のもので見られている。タイの警察官は権力に物を言わせてしばしばラフから金銭を要求し、タイの軍隊や役人はラフの村にやってきて横暴をはたらくと彼らは語る。タイの首相は、国王とともに、「タイのクニ」で権力を行使する支配者として、タイ国の「ボス/親分」(*jaw maw*)とし

て言及される。

しかし「ボス」は一元的に抑圧してくるだけの存在ではない。ラフは自分たちが経験してきた苦境をしばしば「ラフはクニがなく、他人のクニに住んでいる」と表現するが、自らの民族がクニをもつネイションとなりえない原因は、「知恵がない」(*cu yi ma caw*) こととともに、「王/ボスがいない」(*haw hkan jaw maw ma caw*) ことに帰される。「王」や「ボス」という言葉は、「だれか助けてくれる人」(*shu ga la pa*) とも言われるように、庇護者・保護者としてその下にある民を後見しながら支配してくれる寛容なパトロン的統治者という意味合いをもつ。

ラフがタイ政府に期待するパトロン的な態度は、例えばその中心的な政策である開発政策において認められるだろう。ラフ語にはもともと「政府」という抽象的な言葉はないが、現在ではタイ語からの借用語で「ラタバー *la hta ban*」という言葉がややぎこちなく使われる。タイ政府が国家として推進する「開発」政策は、今では北部の山間部の多くにも及び、ラフの大部分もまたこの政治過程について無知ではない。例えば、村に入る道が整備されることは「開発」の具体的な可視的な成果であり、「パタナー（開発）」(*hpa hta na*, これもタイ語からの借用)のひとつとして歓迎される。しかし、「開発」は「政府」によってなされるものであると同時に、場合によってはそれ以上に、「タイ人」あるいは「他人」(*shu chaw*)、「他人のお偉いさん」(*shu chaw ui*)などで表現される、人格化された非ラフの民族集団から寛容に与えられるものとして語られる。ラフにおいては、「国家」や「政府」という抽象的な概念が、少なからざる部分において、具体的な民族主体として理解されているのである。

現在でもラフはタイの国家と政府とを、肯定的であれ否定的であれ多くの部分で、伝統的に「ラフ地域」に存在してきた民族間関係の枠組みにもとづき、「山の民」と「町の民」との対比・対照を軸に、しばしば人格化されて語られる諸民族集団間の権力関係の中でとらえている。他の人々にとっては明確な国境によって範囲を定められた領

域国家によって隙間なく埋められたモザイクとして認識されているこの世界は、ラフの人々によっては依然として多くの部分で、民族集団によって支配され、時によって伸縮する境界の曖昧な複数の勢力圏から成るものとして認識されている。政府による国民建設や「開発」政策によって、近代の国民国家・領域国家の理念は、現在ではタイという国家の周辺部にまで及んでいるように見える。しかし、周辺民族ラフは、近代的な理念にもとづいたこれらの政府政策による影響を、前近代的な民族間の権力関係の枠組みからとらえるのである。

VII. 認識枠組みの複合性

以上で述べてきた通り、ラフにとっての世界は基本的に、さまざまな人間集団によって占められた勢力圏から構成されているが、一方でそこには近代国家的な概念も浸透しつつある。例えば、従来「ラフ地域」にとって外在的で遠い存在であった「タイ人」に対する言及、国籍や国家帰属を基準とした「タイ人」という言葉の使用、ごちないながらも「政府」や「開発」などの外来語の使用の増加は、近代国家的な概念の従来の認識の枠組みへの進入を示している。近代の諸過程の進行の中にありながらも、大きく見れば、近代諸国家のモザイクという世界認識よりも、民族間関係によって構成された世界観が、ラフの世界認識においては依然として優勢といえる一方、より詳細に見るならば、そこには民族関係的な枠組みからの理解と国家的な枠組みからのそれとが微妙な具合に併存している。多くの部分では、政府や国家という抽象的な概念を具体的で人格化された民族的な主体として消化し認識しながらも、ラフの世界認識には微妙な変化が見られるのである。実際ふたつの世界認識モードはラフの中で重層し、状況によって両者の優勢さも変化し、一方が他方に代わってより前面に現れるという複合的な状況にあるといえる。

現実においては、いまやラフのような周辺民族の生活にも、政府による「開発」などの政策は無視できない影響と変化をもたらしている。「前近代」から「近代」への時代の変化は、自然環境に

立脚した自律的な世界であった「ラフ地域」が、国境によって分断され、それぞれの部分において国家的な影響が増してくる過程だった。自然環境のコンテキストが国家的な枠組みによってますます取って代わられていく状況においては、「政府」や「開発」を依然として「山地」と「平地」の対比を軸として眺めているラフの人々にも、近代国家的な観念は今後もっと浸透していくのかもしれない。

VIII. おわりに

ラフにとって近代化の過程は、従来ある程度享受できていた自立性の漸次的な剥奪を意味した。前近代的な政治構造の中で見られた権力の空白部分は次第に埋められ、周辺集団に自立性を許していた名目的で不干渉的な朝貢・従属関係は、住民個人の直接的で全人的な支配をめざす近代的な統治に取って代われつつある。国民建設などの国家政策は、「山地」と「平地」との距離を縮め、「山の民」の「平地の民」への従属と周辺化とを加速させている。

国家による国民建設過程の進行の中で、周辺民族に与えられる「少数民族」という位置が、周辺民族の分離独立を許さないホスト民族とネイションへの完全な同化を拒む周辺民族とが到達する妥協点だとするならば、かつての「自由な山の民」ラフは、いまやタイ国の「少数民族」という立場に近づいているといえるかもしれない。初めに述べた通り、タイ国の北部山地住民にとって「少数民族」という位置づけは、「チャオカオ」への範疇化とほぼ等しい。

カイズはかつて、タイ政府が北部山地民に強制した「チャオカオ」という範疇が、将来山地住民自身による汎民族的な組織づくりの基礎となりうるという可能性を示唆した (Keyes, 1989, 110)。タイ政府政策に反対して起こされた 1999 年の「チャオカオのデモ」(*mop chao khao*) に示されるように、カイズの予言的な示唆は全く実現していない訳ではない。しかし、ラフの日常生活レベルにおいては、タイ語の「チャオカオ」の借用的な使用もほとんど見られず、「チャオカオ」と字義

的には同じ意味のラフ語の「山の民」も、その意味合いは異なっている。現在のところラフ語には「少数民族」に当たる言葉はない⁷⁾。

しかしながら、今後ますます進行していくと思われるタイ政府主導の近代化過程により「山の民」がその意味合いを変えたり、それが「少数民族」に取って代わられたりするのかもしれない。逆に、ラフによる前近代的な認識に枠組みは、近代化の進展の中でも予想外の強固さをもちつづけるかもしれない。あるいは、近代の国民国家・領域国家の理念と相反する「グローバル化」という第三の流れが、ラフの世界認識に別の新たな枠組みを与えることになるのだろうか。これらはこれから注目していくべき問題である。

注

- 1) 本稿におけるラフ語の表記は (Lewis, 1986) に従ったが声調記号は省略した。
- 2) 中国では政策によってラフ語正書法が開発され一部で用いられている。
- 3) 実際に「ラフ地域」を指すのに適当な言葉がない。国際的な枠組みに沿った紹介が長々しい言葉が必要とするのと同様に、地域名称による紹介もまた「大陸部東南アジア北部から中国の西南地方の一部にかけて広がる山地」という長い記述にならざるを得ない。この事実もまた、「ラフ地域」をひとつの自律的な地理世界として見ることの困難さを示している。一方、「ラフ地域」と言う言葉も、それが「ラフ」のみに言及し、さまざまな民族が居住し相互交渉しているこの地域の現実とは異なる印象を与えるゆえに、不適当さが残る言葉である。
- 4) もちろん詳細に見れば、これらの集団それぞれに対してもラフは、ステレオタイプ化されたイメージをもち「ラフ」と差異化していた。
- 5) しかし、ビルマで長く生活した後に近年タイに移入してきたラフにとっては、ビルマ人（特にビルマ軍による横暴）が、依然として彼らの顕著な記憶となっている (Nishimoto, 2000)。
- 6) ラフ語で「民族」に当たる言葉は *chaw ceu* (字義通りには「人」+「種類」) であり、この概念を彼らはおおよそ言語と慣習と身体的特徴の点で固有性をもった人間集団だと理解している。
- 7) 例えば、ラフ語の *chaw ceu i* は字義的には「小さな民族」という意味だが、近代国家における「少数民族」というよりも、前近代的な権力秩序における数と勢力に劣る民族集団という意味合いが強い。

文 献

- アンダーソン, ベネディクト著, 白石さや・白石 隆訳 (1997) 想像の共同体. NTT 出版. Anderson, B. (1991) *Imagined Communities*. Verso.
- Chazee, L. (1999) *The Peoples of Laos*. White Lotus.
- Dang N.V., Chu T.S. and Luu, H. (2000) *Ethnic Minorities in Vietnam*. GIOI Publishers.
- Keyes, C.F. (1989) *Thailand*. Duang Kamol.
- ゲルナー, アーネスト著, 加藤 節訳 (2000) 民族とナショナリズム. 岩波書店. Gellner, E. (1983) *Nations and Nationalism*. Cornell Univ. Press.
- Leach, E.R. (1960) *The Frontiers of Burma. Comparative Studies in Society and History*, 3, 49-68.
- リーチ, エドモンド R. 著, 関本照夫訳 (1995) 高地ビルマの政治体系. 弘文堂. Leach, E.R. (1964 [1954]) *Political Systems of Highland Burma*. Athlone Press.
- Lewis, P. (1986) *Lahu-English-Thai Dictionary*. Thailand Lahu Baptist Convention.
- 西本陽一 (2000) 北タイ・クリスチャン・ラフ族における民族関係の経験と自嘲の語り. 民族学研究, 64, 425-446.
- Nishimoto, Y. (2000) *Lahu Narratives of Inferiority*. The Center for Inter-Ethnic Studies, Rajabhat Institute Chiang Rai.
- 関本照夫 (1987) 東南アジアの王権の構造. 伊藤亞人・関本照夫・船曳建夫編: 現代の社会人類学 3 国家と文明への過程. 東京大学出版会, 3-34.
- 清水昭俊 (1998) 周辺民族と世界の構造. 清水昭俊編: 周辺民族の現在. 世界思想社, 15-63.
- スミス, マーティン 著, 高橋雄一郎訳 (1997) ビルマの少数民族. Smith, M. (1994) *Ethnic Groups in Burma*. Anti-Slavery International.
- Tambiah, S.J. (1976) *World Conqueror and World Renouncer*. Cambridge Univ. Press.
- タイ国労働・社会福祉省公共福祉局山地民福祉部 (Prathet Thai, Krasuwang Raengngan lae Sawatdikan Sangkhom, Krom Pracha Songkhro, Kong Songkhro Chao Khao) (1998) *Thamniap Chumchon bon Phuenthisung 20 Cangwat nai Prathet Thai Pi 2540*. (英題: *Highland Community within 20 Provinces of Thailand, 1997*) タイ国労働・社会福祉省公共福祉局山地民福祉部.
- Walker, A.R. (2003) *Merit and the Millennium*. Hindustan Publishing.
- Wolters, O.W. (1999) *History, Culture & Region in Southeast Asian Perspectives*. Southeast Institute of Southeast Asian Studies.

(2003年11月12日受付, 2004年2月23日受理)